民報サロン

春もみじ萌ゆる

柿沼　雄二

高校時代は国語と英語が好きで、大学は文学部に進んだ。知識を蓄え、発信力と感化力とを備え、教師になりたいと思ったことにもよる。大学で広く学問をしているうち、人の役に立ちたいという思いが高じ、実際に人のことを救えたらと思うに至った。医師になることを目指して文学部を卒業した後に別な大学の医学部に入り直した。

福島県の地域医療に貢献したく、福島医大の外科に入局した。外科を選んだのは、技量を習得し、手術を中心とした医業に携わりたかったのと、外科は治療の最後の砦（とりで）という要素も多かろうと思ったためだ。

初めて手術に携わった時の驚嘆は忘れられない。人体の精巧さと神秘性の前に、造化の神という言葉さえ思い浮かぶほど。同時に、これから始まる王道なき医道に武者震いも。あの時の畏怖と憧憬（しょうけい）と士気とが、今も心の中に溶け合う。

朝のミーティングに始まり、病棟回診、カルテ記載、点滴や内服薬のオーダー、外来、検査、手術。入院対応、救急対応。日曜日の回診当番や、病棟の日直に当直。じっくり勉強もしたいが、ゆっくり座っている時間などない。しかし、知識と技術と人間性を兼ねそろえた先輩たちのおかげで、慎重さと大胆さと、緊張感とテンポと、個々の努力と連帯と、外科の神髄を学んでいけた。自分の至らなさへの苦悩で、強い自己嫌悪や吐き気などを感じたこともあったが、病める方を救いたいと思って志したことを反すうして学問した。実際に感謝される熱量も大きく、医師冥利（みょうり）に尽きると実感できる場面も増えて、今では外科医となって良かったと得心している。

反省や自戒も多いながらも、あまたの薫育を拝受して、私という医師ができあがってきた。まこと、医業とは、仁徳、博愛の道であることを、まざまざと体験してきた。私の手の先に、患者さんの人生があり、その家族の人生があることを、如実に実感しながら。そう考えると、情熱や慈愛には限りはない。医師生活とは、とりもなおさず、知識と経験と精神力と人格の集大成に他ならない。

文学部時代に一冊の書物との出会いが、人生を大きく左右することを実感した。とすれば、一人の医師との出会いが、その方の人生に大きな影響を及ぼすであろうことは論をまたない。発想すること、展望や希望を共にすることの大切さ。医学は科学に相違ないが、何を話すかは無論のこと、どう話すかという文学的要素も大事だと感じてきた。科学と文学のバランス。私がモットーにしてきたことだ。

時は春。医師となって30回目の春だ。春は新緑のイメージだが、春に赤い葉をつけるもみじの種類がある。春もみじと言われているもの。時を忘れずに萌える、その姿に、ひた向きでいちずな命の尊さを感ずる。そのまばゆい赤は、私に生命の輝きと躍動と実りを伝える。春もみじをめでて、改めて、人生は、命を無駄なく使いきる旅なのだろうと思えて、人を救うことを喜びとし、一日一日を大切に生きようと燃え立つ。互いに、生きてきて良かったと言える日に向けて。（郡山市赤木町、総合南東北病院医師）

令和５年５月４日付　福島民報